

**[B年] 復活節第5主日(2023年5月7日)**

**【旧約聖書日課】 申命記 7章6～11節**

<sup>6</sup>あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。<sup>7</sup>主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。<sup>8</sup>ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

<sup>9</sup>あなたは知らねばならない。あなたの神、主が神であり、信頼すべき神であることを。この方は、御自分を愛し、その戒めを守る者には千代にわたって契約を守り、慈しみを注がれるが、<sup>10</sup>御自分を否む者にはめいめに報いて滅ぼされる。主は、御自分を否む者には、ためらうことなくめいめに報いられる。<sup>11</sup>あなたは、今日わたしが、「行え」と命じた戒めと掟と法を守らねばならない。

**【使徒書日課】**

**ガラテヤの信徒への手紙 3章23節～4章7節**

**3** <sup>23</sup>信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。<sup>24</sup>こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。<sup>25</sup>しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。

<sup>26</sup>あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。<sup>27</sup>洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。<sup>28</sup>そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。<sup>29</sup>あなたがたは、もしキリストのものだとする

なら、とりもおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

**4** <sup>1</sup>つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所有者であっても僕と何ら変わるところがなく、<sup>2</sup>父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいます。<sup>3</sup>同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。<sup>4</sup>しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。<sup>5</sup>それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。<sup>6</sup>あなたがたが子であることは、神が、「アッパ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。<sup>7</sup>ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

**【福音書日課】**

**ヨハネによる福音書 15章12～17節**

<sup>12</sup>わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。<sup>13</sup>友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。<sup>14</sup>わたしの命じることを行えば、あなたがたはわたしの友である。<sup>15</sup>もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。<sup>16</sup>あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。<sup>17</sup>互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。』

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 申命記 7章6～11節

<sup>6</sup>あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地上にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。<sup>7</sup>あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主が心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった。<sup>8</sup>ただ、あなたがたに対する主の愛のゆえに、また、あなたがたの先祖に誓われた誓いを守るために、主は力強い手によってあなたがたを導き出し、奴隷の家、エジプトの王ファラオの手から、あなたを贖い出したのである。<sup>9</sup>あなたは、あなたの神、主こそ神であり、真実の神であることを知らなければならない。この方は、ご自分を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって契約と慈しみを守る、<sup>10</sup>ご自分を憎む者には報いて滅ぼされる。ご自分を憎む者にはためらうことなく報いられる。<sup>11</sup>あなたは、今日私が行うように命じた戒めと掟と法を守らなければならない。

## ガラテヤの信徒への手紙 3章23節～4章7節

3 <sup>23</sup> 真実〔別訳→信仰〕が現れる前は、私たちは律法の下で監視され、閉じ込められていました。やがて真実が啓示されるためです。<sup>24</sup> こうして律法は、私たちをキリストに導く養育係となりました。私たちが真実によって義とされるためです。<sup>25</sup> しかし、真実が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。

<sup>26</sup> あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。<sup>27</sup> キリストにあずかる洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。<sup>28</sup> エダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。<sup>29</sup> あなたがたがキリストのものであるなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

4 <sup>1</sup> つまり、こういうことです。相続人が未成年であるうちは、全財産の所有者であっても奴隷と何ら違いはなく、<sup>2</sup> 父親の定めた時期までは後見人や管理人の下にいます。<sup>3</sup> 同様に、私たちも未成年であったときには、この世のもろもろの靈力に奴隷として仕えていました。<sup>4</sup> しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から生まれた者、律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。<sup>5</sup> それは、律法の下にある者を贖い出し〔直訳→買戻し〕て、私たちに子としての身分を授けるためでした。<sup>6</sup> あなたがたが子であるゆえに、神は、「アッパ、父よ」と呼び求める御子の靈を、私たちの心に送ってくださったのです。<sup>7</sup> ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人でもあるのです。

## ヨハネによる福音書 15章12～17節

<sup>12</sup> 私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これが私の戒めである。<sup>13</sup> 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。<sup>14</sup> 私の命じることを行うならば、あなたがたは私の友である。<sup>15</sup> 私はもはや、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。私はあなたがたを友と呼んだ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。<sup>16</sup> あなたがたが私を選んだのではない。私あなたがたを選んだ。あなたがたが行って実を結び、その実が残るようにと、また、私の名によって願うなら、父が何でも与えてくださるようにと、私あなたがたを任命したのである。<sup>17</sup> 互いに愛し合いなさい。これが私の命令である。』

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・5月7日「復活節第5主日」の日課主題は「神の子の自由」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、主なる神がご自分の民を選んだ理由を告げる箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、洗礼によって神の子とされたことを確認する箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、

**旧約日課(申命記7章より)**

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トラー)」の第五巻、「モーセ物語」を完結させる文書。古い伝承では、「列王記下」22～23章で語られる南王国ヨシヤ王の下で進められた改革の発端になったとされる神殿で見つかった「律法の書」が「申命記」の骨格部分であったとされてきた。正典「律法と予言者」は、前6世紀、ペルシア支配の時代になりバビロン捕囚から解放されてエルサレム神殿の再建の事業の一翼を担った集団(祭司＝予言者グループ?)によって、編纂が進められた。その集団は、自らの集団のルーツがヨシヤ王時代の改革を担った祭司集団にあると自認し、「申命記」に特徴的に示されるような歴史観に基づいた正典編纂を目指したのだろうと考えられる。このような時代背景を反映して、「申命記」は、ダビデ王家を至上とするような「王国神学」は注意深く取り除かれる一方、事実上は祭司＝予言者を担い手とするようになる「律法神学」、つまり「神の言葉」を至上とする思想が前面に押し出されるものとなっている。

・「申命記」の主要部は、荒れ野の四十年の旅の終わり、モーセが自らの死期を悟る中で、民と共に歩んできた日々を振り返り、またシナイ山で授与された「律法」を再度告げ直すという、訣別説教の建付けとなっている。日課箇所は、「シナイ契約」の最初に授与された「十戒」を確かめた後(5章)、「律法」授与の意義を荒れ野の旅と結びつけて説き教えていく大部(6～11章)の一部である。前段では、ヨシヤに率いられてカナンに侵入する直前という事情を踏まえて、排除すべき「七つの民」やそれに関連する異教像のことが取り上げられている(1～5節)。これら異教の民に対する強い敵対心が示されるのは、彼らが「イスラエルにまさる数と力を持つ」者たちの代表だからである。そこに挙げられる「七つの民」は、必ずしも歴史的に同定できる特定の民族集団を指しているとは言えないが、カナン地方を超えたオリエント世界で広く勢力を有していた諸集団を指しているものと推察されるのである。別言すれば、「申命記」は、イスラエル(ユダ)の民が実際に隣人として接触し歴史的に紛争を経験してきた諸集団については、23:3～9のように具体的に知っている。「七つの民」は、古代オリエント世界で覇権を争った強大な諸民族集団を総称しているのである。そのようなことを踏まえて、日課箇所では、エジプトから導

き出されてきたというイスラエルの民が、相対的に小集団に過ぎなかったとされている。つまり、「出エジプト記」12章で語られるような「イスラエルの男子だけで60万人」にもなる大集団ではなかったと、「申命記」は理解しているのである。それは、前6世紀に最終的に編纂された「申命記」が、自分たちのルーツとして語ろうとするモーセの時代の先祖たちは、実のところ、だれもが認めるような公認の出自を誇れるような集団ではなかった、ということをも示唆しているのだろう。

**使徒書日課(ガラテヤ3～4章より)**

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれている書簡文書。パウロがアンティオキア教会から派遣されたバルナバの宣教団に参画して伝道・教会形成に携わることになったとされるガラテヤ地方の諸教会に宛てて記した書簡。

・パウロはこの書簡の中で、「割礼」と「律法」を激しく拒否しているが、それは、これらが「ユダヤ人」を枠づけるものであったから。パウロは、教会共同体に加わる前は、前1世紀以降急速に勢力を拡大しつつあった「ラビ」を律法指導者とする「ファリサイ派」の一員であったが、その考え方に基けば、「神の民」の共同体としての「ユダヤ人」は、「割礼」と「律法」によって外形的な生活習慣を枠づけられた者たちのこととされた。それは、ユダヤ人の生まれではない異邦人であっても、「割礼」を受け「律法」の規定する生活習慣を守るならば、「ユダヤ人」と同等の者として「神の民」の正当な構成員に数えられるが、逆に、ユダヤ人の生まれであっても、「律法」の規定する生活習慣から逸脱している者は「神の民」の共同体から疎外されることを意味した。当時のローマ帝国下での「ユダヤ人」は、「神の民」の共同体を概念的に構想していたわけではなく、世界に広がる「会堂」に属する者たちの具体的な共同体として認識していた。前1世紀から後1世紀の帝政ローマの最初の一世紀の時代、ユダヤ人は皇帝によって特別な権利を認められた社会集団であったため、「ユダヤ人」の共同体に所属することは、彼らにとっては、内的動機のみならず、外的要請のあることでもあった。「割礼」を受け「律法」の規定した生活習慣を守り「会堂」組織に属することは、ローマ帝国下では、いわば生存権を確保することを意味したのであり、大げさに言えば「救い」に入ることだった。それに対して、パウロが自らの回心体験から主張したのは、この「救い」の共同体である「神の民」に属する者となるための枠組みとして、「割礼」と「律法」を不要とし、「洗礼」のみを要請するというものだった。「洗礼」は、使徒たちの教会共同体でイエス・キリストに従う者としての入信儀礼として最初から行われていたが、初代教会の構成員は皆、生まれながらのユダヤ人であったため、共同体加入という位置づけは曖昧であった。パウロは、主イエスがユダヤ人として生まれながら「罪人や徴税人」として共同体から疎外されていた人々を回復する運動を進めたことを知り、そこに「新しい共同

体の枠組み」が生まれたと理解したのである。そのような「新しい共同体」への加入の筋道こそ、「イエス・キリストと結ばれる洗礼」であると主張し、それが「聖霊」理解に基づいて正当であると主張しているのが、日課個所である。神を「アッパ、父よ」と呼ぶことを可能にする「聖霊」がすでに与えられていると言えることで、「洗礼」によって「御子」と結ばれていることを保証するという論考を、パウロは、「ローマの信徒への手紙」8章でも同様に展開している。

### 福音書日課(ヨハネ 15 章より)

・日課箇所は、「最後の晩餐」の場面で主イエスが弟子たちに教えられた一連の教えの内、「ぶどうの木のとえ」に続く箇所の教え。冒頭 12~13 節と最後 17 節の「互いに愛し合いなさい」という「掟」は、一連の教えの最初でも告げられていた(13:34)。この「掟」は、「ヨハネの手紙一」で強調される中心的な教えでもある。ところが、日課箇所の中間部 14~16 節は、必ずしもこの「掟」を告げる枠の中に置かれる必然性を持たない内容となっている。つまり、御父のもとから来た御子イエスが御父との親密な関係を持っているように、御子イエスが「友」と呼ぶ弟子たちも御父との親密な関係に入っていくことが可能とされている、という教えは、「愛の掟」とは無関係に、一連の教えの中で繰り返し告げられている事柄である。それが一連の教えの主たる強調点であることは、その教えのまとめとも言える 17 章の内容から明らかである。すると、日課箇所は、この一連の教えで強調されている「御父～御子～弟子たち」の親密な関係性構築という主張を外形的に保証することとして「互いに愛し合いなさい」という「掟」を組み込もうとしているものだと考えられる。つまり、「手紙一」が明示的に主張するように、「御父・御子」との親密な関係にある(つまり「神を愛する」)者は、当然のこととして「互いに愛し合う」(「兄弟を愛する」)者であるべきだという、教会共同体の倫理神学がここに据えられようとしているのである。

### 来週の誕生日 (5月7日～13日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-12 番「とうときわが神よ」(= I 16「いとよきみかみよ」)は、17-18 世紀ドイツの敬虔派牧師クラッセルト(クラッセリウス)の作詞。曲は、もともと別の歌詞につけられていたが、1704 年出版の敬虔派讃美歌集でクラッセルトの歌詞と組み合わせられたもので、以後、広く歌われるようになった。J.S.バッハは、クラッセルトの歌詞に自作の旋律をつけている。
- ・21-487 番「イエス、イエス」は、20 世紀スコットランド教会で按手を受けアフリカ宣教に従事した宣教師 T.S.コルヴァンが現地信徒ら自身に伝統音楽に基づいて創作させた讃美歌集『Fill Us With Your Love』に収録された讃美歌の一つ。「主の洗足」の記事に基づいて主の愛に従う道を歌う。
- ・21-74 番「キリストの示す神を」は、チロル地方出身の現代カトリック宗教詩人トゥールマイルが新しく創

作したエキュメニカル讃美歌。17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家クリューガーの曲につけられている。

#### 21-12「とうときわが神よ」

### Dir, dir, o Höchster, will ich singen

1. Dir, dir, o Höchster, will ich singen, / denn wo ist doch ein solcher Gott wie du? / Dir will ich meine Lieder bringen; / ach gib mir deines Geistes Kraft dazu, / daß ich es tu im Namen Jesu Christ, / so wie es dir durch ihn gefällig ist.
2. Zieh mich, o Vater, zu dem Sohne, / damit dein Sohn mich wieder zieh zu dir; / dein Geist in meinem Herzen wohne / und meine Sinne und Verstand regier, / daß ich den Frieden Gottes schmeck und fühl / und dir darob im Herzen sing und spiel.
3. Verleih mir, Höchster, solche Güte, / so wird gewiß mein Singen recht getan; / so klingt es schön in meinem Liede, / und ich bet dich im Geist und Wahrheit an; / so hebt dein Geist mein Herz zu dir empor, / daß ich dir Psalmen sing im höhern Chor.
4. Denn der kann mich bei dir vertreten / mit Seufzern, die ganz unaussprechlich sind; / der lehret mich recht gläubig beten, / gib Zeugnis meinem Geist, daß ich dein Kind / und ein Miterbe Jesu Christi sei, / daher ich »Abba, lieber Vater!« schrei.
5. Was mich dein Geist selbst bitten lehret, / das ist nach deinem Willen eingerichtet / und wird gewiß von dir erhört, / weil es im Namen deines Sohns geschicht, / durch welchen ich dein Kind und Erbe bin / und nehme von dir Gnad um Gnade hin.
6. Wohl mir, daß ich dies Zeugnis habe! / Drum bin ich voller Trost und Freudigkeit / und weiß, daß alle gute Gabe, / die ich von dir verlanget jederzeit, / die gibst du und tust überschwenglich mehr, / als ich verstehe, bitte und begehre.
7. Wohl mir, ich bitt in Jesu Namen, / der mich zu deiner Rechten selbst vertritt, / in ihm ist alles Ja und Amen, / was ich von dir im Geist und Glauben bitt. / Wohl mir, Lob dir jetzt und in Ewigkeit, / daß du mir schenkest solche Seligkeit.

#### 21-487「イエス、イエス」

### Jesus, Jesus, Fill Us with Your Love

Refrain: Jesu, Jesu, fill us with your love, / show us how to serve / the neighbors we have from you.

1. Kneels at the feet of his friends, / Silently washes their feet, / Master who pours out himself for them.
2. Neighbors are wealthy and poor, / Varied in color and race, / Neighbors are nearby and far away.
3. These are the ones we should serve, / These are the ones we should love: / All these are neighbors to us and you.
4. Kneel at the feet of our friends, / Silently washing their feet: / This is the way we should live with you.

#### 21-74「キリストの示す神を」

### Dank sei dir, Vater

1. Dank sei dir, Vater, für das ewge Leben / Und für den Glauben, den du uns gegeben, / Daß wir in Jesus Christus dich erkennen / Und Vater nennen.
2. Jedes Geschöpf lebt von der Frucht der Erde; / Doch daß des Menschen Herz gesättigt werde, / Hast du vom Himmel Speise uns gegeben / Zum ewgen Leben.
3. Wir, die wir alle essen von dem Mahle / Und die wir trinken aus der heiligen Schale, / Sind Christi Leib, sind seines Leibes Glieder, / Schwestern und Brüder.
4. Aus vielen Körnern ist ein Brot geworden: / So führ auch uns, o Herr, aus allen Orten / Zu einer Kirche durch dein Wort zusammen / In Jesu Namen.
5. In einem Glauben laß uns dich erkennen, / In einer Liebe dich den Vater nennen, / Eins laß uns sein wie Beeren einer Traube, / Daß die Welt glaube.
6. Gedenke, Herr, die Kirche zu erlösen, / Sie zu befreien aus der Macht des Bösen, / Als Zeugen deiner Liebe uns zu senden / Und zu vollenden.